

氏名(国籍)	李 貞 熙 (韓 国)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博 甲 第 1,768 号
学位授与年月日	平成 10 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	安部公房の小説から見る現代の日本文化 —安部公房のテクスチュアリティ—
主査	筑波大学教授 理学(文学) 荒木正純
副査	筑波大学教授 名波弘彰
副査	筑波大学教授 阿部軍治
副査	筑波大学教授 池内輝雄
副査	筑波大学助教授 新保邦寛

## 論文の内容の要旨

本論文は、安部公房のシュールリアリスム風の初期短篇小説4編、1960年代以降のより現実社会に密着しようとする姿勢をみせる長篇小説3編を分析対象とし、彼の文学の方向性がどのような新しい叙述方法をもって、新しい主題を捉えようとしているかを考察するものである。

本論文の構成は以下の通りである。

### 第1部(短篇小説) メタモルフォーゼの時代

第1章 平和のアンティテーゼ、または<極悪の植物>へー『デンドロカカリア』論

第2章 <おれ>の<ユダヤ性>にみる実存的状況ー『赤い繭』論

第3章 想像力と分析精神ー『バベルの塔の狸』論

第4章 都市的逸脱と<変身>ー『壁-S・カルマ氏の犯罪』論

第5章 <変身>のモチーフをめぐってー初期短編を中心として

### 第2部(長篇小説部) <変身>する世界と言葉

第1章 潜在的痴漢と仮面時代ー『他人の顔』論

第2章 言葉の森と官能の海ー『箱男』論

第3章 『飛ぶ男』論1・変貌するテクストー刊行本『飛ぶ男』に至るまで

第4章 『飛ぶ男』論2・〔スプーン曲げ少年に関するレポート〕について

第5章 『飛ぶ男』論3・デジタルブック『スプーン曲げの少年』

第6章 『飛ぶ男』論4・『飛ぶ男』へ

結章

参考文献

付録

初出一覧

第1部では、4編の短篇小説が分析の対象となっている。第1章は『デンドロカカリア』を論じ、題名(ラテン語)の語源的意味作用をてがかりとして、主人公が植物に変身することの意味が問われており、それは<悪>

ということへの変身であるとされる。第2章の『赤い繭』は、個人と国家権力との関係性を追究し、そこに＜変身＞がからんでくる様相を分析している。第3章の『バベルの塔の狸』は、人間存在が詐術性に満ちた言語と論理に規定されていることを表象しており、言葉遊びを多用し、現代社会における人間存在と所有・被所有という関係が追究されているという。第4章の『壁-S・カルマ氏の犯罪』では、鏡像関係にみられる＜世界／反世界＞という二項対立のモチーフから、現代都市社会の人間疎外という問題だけでなく、記号化された登場人物を介して、人間存在そのものの＜悪＞が描かれていると読んでいる。第5章は、1～4章までの分析を＜変身＞を主軸として総括する。そして＜変身＞のモチーフの位相が3つにわけて整理され、＜逃亡／定着＞＜疎外／消滅＞＜所有／存在＞を意味するものと読んでいる。

第2部第1章は『他人の顔』を扱い、それが典型的な＜変身＞を扱ったものであり、都市の複雑な人間関係、絶えざる変化をみせる都市生活者の多面性を＜仮面＞に集約していると分析し、この作品が短篇から長篇への転機をなしていると判断している。第2章で扱われる『箱男』は、＜箱男＞という新造語を用いて、1960年代に現象した浮浪者ないしホームレスを表象し、現代都市の中に住みながらも、そこから疎外されている存在のあることを追究しているとする。第3章から第6章までは、遺稿作『飛ぶ男』に関して考慮がなされている。第3章では、複数の未発表原稿から刊本へと、いかにテキストが変貌をとげるかが分析される。第4章は、そうしたテキストのひとつである〔スプーン曲げ少年に関するレポート〕が、＜ルポ＞という表現形式を中心に分析されている。第5章では、デジタルブック『スプーン曲げ少年』が扱われ、当時の社会現象であった「校内暴力」「体罰教師」の描かれ方が分析の対象となっている。第6章は、『スプーン曲げ少年』から『飛ぶ男』へとテキストが変貌することで、いかに主題が変化をみせたかを分析している。結章は、これまで分析してきたことを総括し、＜変身＞のモチーフの特性、「現代文学の可能性」、さらに安部公房文学を介して捉えられる現代日本文化の考察を行っている。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、一見すると、第1部と第2部とが不連続であるようにみえる。まず、短篇小説と長篇小説との区別があり、それぞれにみられる分析の姿勢が異なっているからである。すなわち、第1部では作品ないしテキスト分析が中心となり、いわゆる作品論の様相を呈している。また、第2部では、テキストの外部、つまりテキストが生産された社会状況、および作品安部公房の伝記的資料が使用され、分析の正当化に用いられている。つまり、作家論的な方法がみられるのである。とりわけ、第2部第4章から第6章の『飛ぶ男』論は、安部公房のテキスト生産過程が綿密に辿られており、彼の創作姿勢の研究がなされている。そのため審査においても、第1部にみられる綿密なテキスト分析を評価する者と、反対に第2部で示した実証能力を評価する者がいた。

しかし全体としてみれば、著者の関心は常に一貫していたことがわかる。つまり、それは＜変身＞のモチーフである。このモチーフは、物語内容のレベルで現れる場合と、物語形式（ディスコース）のレベルで現れる場合、さらには両方のレベルの交錯するところに現れる場合がある。著者は、その状況を忠実に取り扱ったといえる。この＜変身＞というモチーフが、安部公房文学のひとつの表現様式として、各テキストで追究されており、その様式が何を表象内容としているかが、それぞれの分析で扱われているとみなすことができる。結局、この変貌する表象を介して、安部公房は自ら生きた時代の同時代性の追究をしたということが、著者の主旨となる。以上の捉え方をいちばんよく表しているのが、『飛ぶ男』論であろう。それはまた、書記文芸ではなく、デジタルブックへの可能性を示唆しているところに、象徴的に現れている。

『飛ぶ男』論は、論文全体の約3分の1を占め、著書はこの論に向かって助走しつつここに達したといえる。その間、テキスト分析と解釈技術、そして資料操作の方法を習熟したのである。先述の分かれた評価は、実に著者のふたつの力を認めるものとなっている。各作品の分析において首肯しがたいところが散見されるものの、著

者のテキストへの真摯で綿密な読みの姿勢は、審査員全員が一致して評価するところである。先行論文を十分に踏まえつつ独自の論を展開しようとする意志が明確であり、分析に用いられている手法においても、従来の安部公房研究にみられない創見があり、こうしたことから新しい安部公房研究となっているといえる。とりわけ『飛ぶ男』論では、未発表原稿が使用され、安部公房の創作過程を解明したことは、学界に寄与するところ大と認められる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。